

庚申堂 (こうしんどう)



①歴史・概要

庚申堂は、堂内に「庚申さん」と呼ばれる青面金剛立像などが祀られ、人々の信仰を集めています。また、町の人々の会所としても利用されています。

西新屋町の庚申堂には、昔、疫病が流行した際、元興寺の護命僧正が祈ると青面金剛が現れて疫病を鎮めたため、以来青面金剛を祀り、講を作った旨の伝承が伝わっています。

庚申信仰と猿

わが国では、暦の「庚申」の日の夜、睡眠中に体から三尸さんしという虫が抜け出して天に昇り、人の生死をつかさどる天帝に当人の悪事を告げ口し、天帝はその罰として命を短くすると信じられてきました。そして、三尸が天に昇れないように、庚申の日の夜は地域の人々が集まって夜を過ごす庚申講が行われました。平安時代は宮中の習慣でしたが、江戸時代には庶民にも広まりました。

猿は、庚申の「申」にちなんで庚申信仰と結びつき、青面金剛のお使いと言われるようになりました。

ならまちでは厄除けのため家の軒先に赤白の布で猿をかたどった「身代わり申」をつるす光景が見られます。また、庚申堂のあちこちにも猿の像が置かれ、人々を災いから守ってくれています。



②庚申堂内部

地藏菩薩立像
幼子や地獄などで苦しむ亡者を救う

青面金剛立像
悪鬼を退け延命をもたらす

吉祥天立像
福德を授ける

富士山と阿弥陀三尊、下方に孔雀明王と猿が描かれている珍しい曼荼羅です

頭部内の銘から、室町時代の天文14年(1545)に、宿院仏師源次という奈良の仏師により造られたことがわかっていきます。

6本の腕をもち、人型の者をつかむという、青面金剛像の典型的な特徴がみられます。憤怒の表情や腕・足に巻き付く蛇など、勇ましい姿が印象的です。

左手に火焰宝珠を持っています。かつてこの辺りは元興寺の境内で、古くから吉祥天が祀られてきました。その伝統を受け継ぐ仏像です。

千体
地藏像

富士
曼荼羅図

弘法大師
坐像